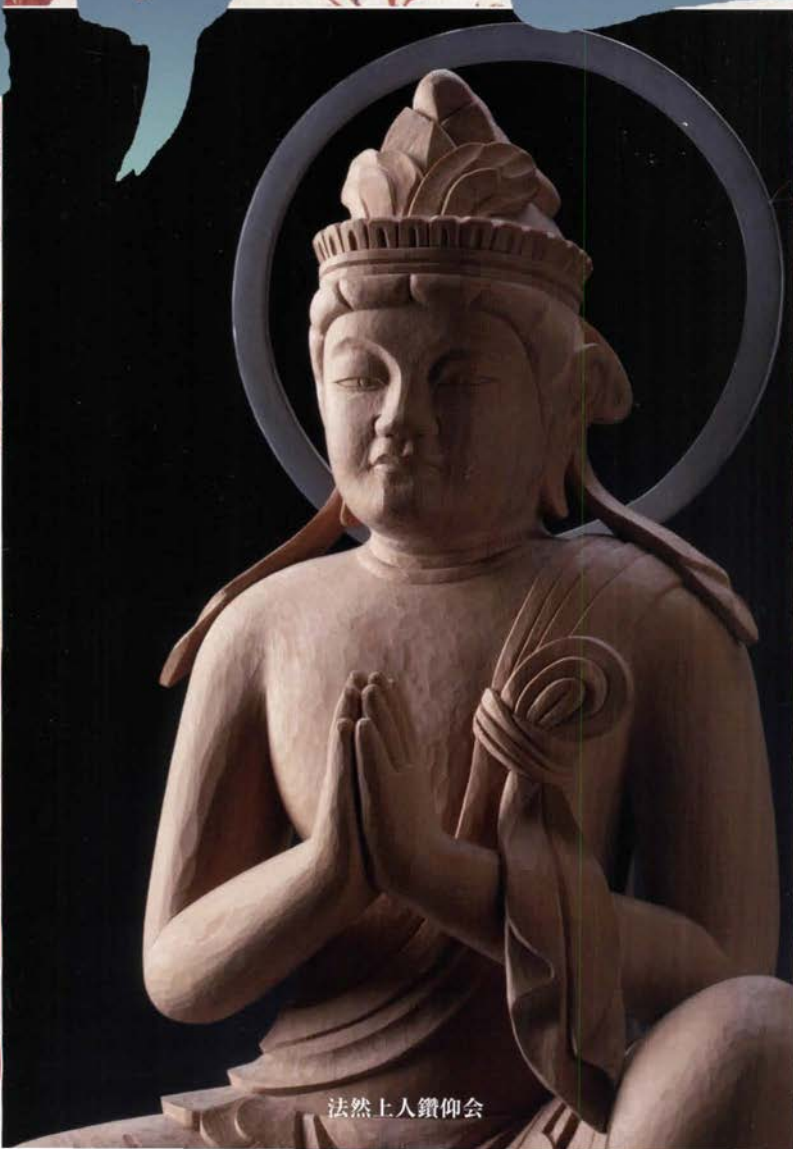


monthly JÔDO

2011
6
JUN



法然上人讃仰会

陸奥上人を崇く

二十五霊場十四番

播磨高砂

十輪寺

◆御詠歌◆

うまれては
まずおもい出ん
ふるさとに
ちぎりし友の
ふかきまことを

私が先に極楽浄土に生まれましたら、まずまっさきに、この世でともに極楽往生を願い契りあった皆さん方の深い真心を思い出すことでしょう。どうかお念仏を一層お励みください。

2011年表紙 雲中供養菩薩（東京白金・戒法寺蔵）

仏師 鈴木禮次郎

浄土

2011/6月号 目次

東北に念仏を弘めた人々	鈴木聖雄	2
法然上人を歩く 播磨高砂十輪寺	高橋良和	8
江戸を歩く	森 清鑑	10
会いたい人 笈田ヨシさん③	関 容子	22
響流十方	袖山榮輝	30
新連載 師を慕う親鸞	石丸晶子	34
小説 渡辺海旭	前田和男	40
誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48

表紙裏・法然上人を歩く＋表紙の人

背表紙裏・法然上人を歩く 播磨高砂十輪寺



表紙題字＝中村康隆前浄土門主
 アートディレクション＝近藤十四郎
 協力＝迦陵頻伽舎

東北 念仏 弘めた 人々 を に

鈴木聖雄

すずき しょうおう
山形県谷地誓願寺住職
村山地名研究会代表幹事
アラハバキ学会副会長
東北アイヌ語地名研究会理事
舞草刀研究会理事
著書『奥羽近代念仏験記』

『無能和尚行業記並びに行業遺事』

①

空也上人に 拠る

本年は、東北新幹線も青森まで延伸し、京都からでも六時間余で到着可能となり、また、空路を使えばひとつ飛びの時代なのですが、奈良・平安時代には、異国のような遠い国が、陸奥の国、出羽の国でありました。

こうした辺境の地は、朝廷軍に拠つて鎮撫されていきますが、早くに同化した民人を熟蝦夷と呼び、従順しない者等を鹿蝦夷、また、遠く辺鄙な所に住んでる者を都加留と呼んでいました。

念仏の教えがこうした東北に入ったのは空也上人（九〇三―九七二）に拠るもので、十世紀の中頃といわれます。康保元年（九六四）に会津の八葉寺を開かれ、阿弥陀如来を造立したことや、同地に伝承されている空也念仏がその結実といえます。

また、融通念仏宗を開いた天台宗の良忍上人（一〇七二―一一三二）は、その弟子である浄縁を遣わして会津若松の地に融通寺を建立し、後年、先の空也念仏をも吸収していったと言われます。また、文禄元年（一五九二）には、浄土宗となり、今に至っております。

このほかにも会津大仏（願成寺＝浄土宗）を開いた実成房など、配流にまつわる念仏弘通もあります。本格的な開教というのは、鎌倉期の金光上人を待つことになります。

東奥念仏の始祖 金光上人

東奥といひますのは、現在の青森・津軽地方を指して呼ぶ名なのですが、標題は、「本州最北端まで念仏の思想を広めた上人」という解釈も成り立ちます。

上人は、久寿二年（一一五五）に現在の福岡県田主丸町に生まれ、幼くして在所の石垣山観音寺に学びました。十三歳の夏、一人で比叡山に登り、東塔北谷きたにの恵光房円融みいに師事したといひます。この時、金光房と名づけられます。その後、近江の三井寺みいでらにも遊学し、『末法念仏独妙鈔』を著し、法名を円証と名りました。

金光上人三十二歳の頃、郷里の観音寺に別当職として任ぜられ比叡山を離れます。観音寺の修復や、筑後川の改修など民衆のためにも働いたのですが、寺領をめぐる論争が起こり、二年後には鎌倉幕府へ上訴するという出来ごとが起りました。

そんな時、道弁（遍）という人に誘われ、法然上人のお弟子である安樂房の法談を聴聞するのですが、深く感ずる所があつて訴訟を取り止め、鎌倉から京に上つて法然上人の元で修学されました。

やがて、四十六歳となった金光上人に、師の法然は、奥州を念仏教化するよう命ぜられたとも言われています。翌、建仁元年（一二〇一）には、会津で教化され、徐々に北へと歩を進められました。

弘前市西光寺境内の上人塚
(平成14年7月現在)



現在の宮城県加美郡・志田郡・玉造郡・遠田郡・栗原郡を幾度か教化し、栗原郡や加美郡には往生寺を建立しております。

元久元年(一二〇五)、上人五十一歳の時に奥州の都であった平泉に入り、遠野・花巻・南部にも寺を建てられました。また、翌年には、出羽の秋田土崎にも金光寺を建立し、目まぐるしいほどの活躍をなさいました。

五十四才の時、「汝、津軽の外ヶ浜に到れ、そこで逢わん」との阿弥陀如来の夢告を感

得し、いよいよ青森の地へと足を踏み入れます。

先にも述べましたように、東北一带には土俗の信仰があり、それ等を祀る人民が上人を討とうという行動が起きました。地方の文書にも「荒吐族に追われ検非違使庁に逃げる」などが残り、一時、警察所に逃げ、暫く留置されたりもしたようです。

そのような事が二、三度あり、それでも上人は、根強く阿弥陀仏の思想を説いてまわる。こと九年、藤崎に摂取院、浪岡に西光寺、大中山には梵場（寿）寺を開いて、念仏の昂揚に励まれました。土地の者には上人を慕う人もおりましたが、「阿保唄」など作ってあざける者もあり、それは大変な布教だったことが推察されます。

五尺三寸と壮健な体軀であつた上人も肺が冒され、五十九才の頃から吐血するようになりました。病のため一時休息することもあつたのですが、それを押して、説法を続けていったところ、病状は悪化し、建保五年（一二二七）三月二十五日、御歳六十三歳の時浪岡・西光寺において入寂されました。

上人の御遺体は、遺言に拠つて北中野に葬られ、寺院と共に遺存されて来ましたが、津軽為信公の時代、弘前城を構築するに当り、西光寺も弘前に移され、写真の上人塚もまた、江戸時代になって、現在の西光寺に移遷されております。

（つづく）

講師

梶村 昇

いのちの無常と 来世への希望

かじむら のぼる

元亜細亜大学教授

著書

日本人の信仰—民族の「三つ子の魂」

法然のことば

法然の言葉だった「善人なをもて往生をとぐいはんや悪人をや」

弁長・隆寛 浄土仏教の思想

勢観房源智（念仏に生きた人）

日本のまごころ—聖徳太子

森と水と大地—アジアの自然を考える

ほか多数

会場 東京芝**大本山増上寺 慈雲閣1Fホール**

6月24日(金)

午後**1:30**開場 午後**2:00**開演(3:30終了予定)

会費 **1,000円**

当会会員無料

問い合わせ先

—法然上人鑽仰会—

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

電話 03-3578-6947 FAX 03-3578-7036

結怨上人を歩く

二十五霊場十四番

高橋良和著 『法然上人紀行』 (探究社) より抜粋

播磨高砂

十輪寺

兵庫県高砂市の十輪寺は西山禅林寺派の末寺で、いわゆる同派のなかでの檀林の寺格を有する名刹である。

伽藍も立派であり、そして名刹としての格調をもっている寺院であるが、この寺が法然の四国流罪の際の道すがらにあたる。

建永二年(一二〇七)に、例の住蓮、安楽の事件で、法然が四国流罪をうけて讃岐に赴く途中、この地に立ち寄っている。

元来高砂は海辺であり、昔からの漁港であつたらしい。京都を出た法然が、この海辺で漁師を化導したのである。

そのときのことを、四十八巻伝の第三十四、配所御下向の巻の漁夫教化のところに、

播磨の国高砂の浦につき給ふに、人おほく結縁しける中に、七

旬あまりの老翁、六十あまりの老女、夫婦なりけるが申しけるには、「わが身はこの浦のあまなり。おさなくよりすなだりを業とし、あしたゆうべいろくづの命をたちて、世をわたるはかりごととす。ものの命をころすものは、地獄におちてくるしみたへがたく侍るなるに、いかがしてこれをまぬがれ侍るべき、たすけさせ給へ」とて手をあはせてなきけり。

とある。

この漁夫に念仏のおしえをすすめ、「手にすなだりすることやまざりけれども、口には名号をとなへ、往生をとげるよしつたへき給ひて」とある。

この寺の本堂の西に墓があつて、そのなかに「願空浄海法子」というのと、「乗空智海法尼」という二つの石碑がある。

その石碑の右側には、この人の略歴を記しているが、その終りに「明和六年丑三月」の建立の日時が記されている。

これは明かに法然の化益をうけたこの漁夫の法名であつて、その老漁夫は、八田治郎太夫と称するらしく、もう一つの碑はその妻なのである。

この寺は弘仁六年（八一五）の建立で、弘法大師が勅賜によつて鎮護国家の道場として、建立されたものであり、昔は地藏菩薩を安置したから地藏山といったらしい。

第四十回

江戸を歩く

深川木場に向かって歩く

森清鑑

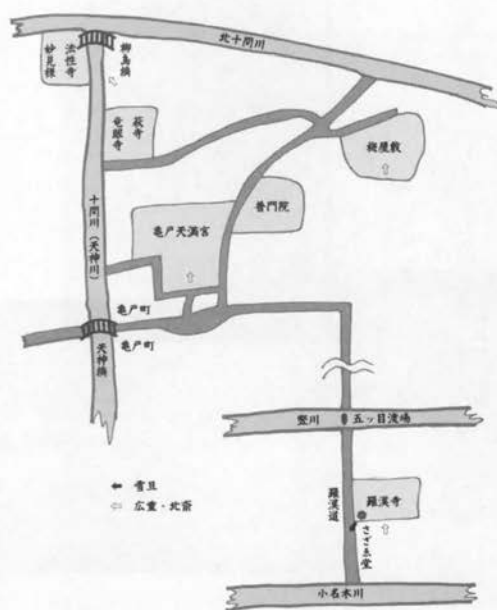
大江戸ウォーカー

羅漢寺

亀戸天神表門から出て天神橋から来る道を左に曲がる。辺りは亀戸村の農家が点在し、畑である。この道は直角に南に折れる。この一本道をしばしば歩くと堅川にぶつかる。そこには橋が無く、渡し船で対岸に渡る。五つ目の渡し場である。渡ってさらに南に下る。この道は、羅漢様に参詣する主道の意味で通称、羅漢道と呼ばれていた。道沿いに田畑に囲まれた四角い寺域が忽然と現れる。これが羅漢寺である。寺域は細い堀割で仕切られている。羅漢道の右側に小体な茶屋がならび、丸い堀橋を渡って中に入ると、目の前に漢門（総門）が控えている。潜ると広い境内が展開する。石畳の細い参道は、境内を直角に北に曲がり、天王殿を潜って本殿に至る。本殿に直結して廊下が延び、左右の羅漢堂に繋がっている。羅漢堂は、縦方向に建ち、右側が東羅漢堂、左が西羅漢堂である。漢門、さざえ堂、西羅

漢堂は、羅漢道に沿って北に並んでいる。

羅漢寺の創建は元禄八年（一六九五）。開基は松雲元慶。開山は彼の師、鉄眼。黄檗宗であった。江戸期、羅漢寺は各地にあり、羅漢信仰は盛んであった。江戸の羅漢寺は、將軍綱吉、吉宗の支援を得て造営がなされ、「本所の羅漢さん」として親しまれるようになる。羅漢とは阿羅漢の略。釈迦滅後、經典の編纂に参加した弟子で最高の聖者をいう。



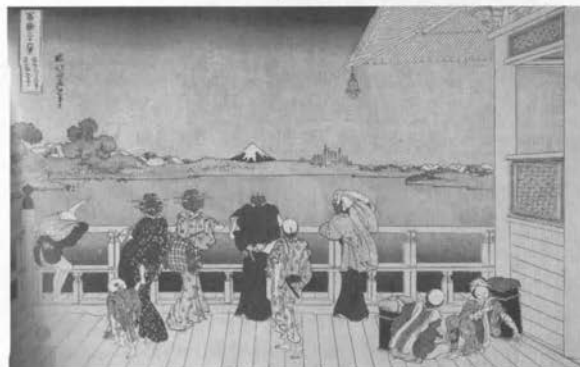
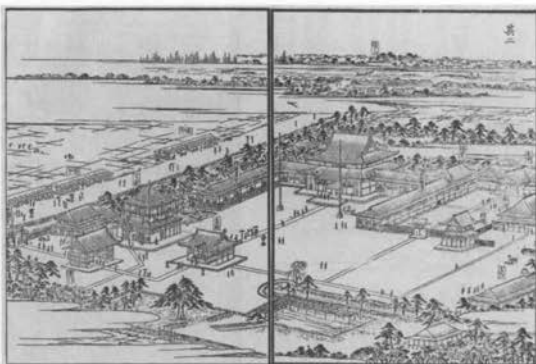
◆散歩図

その数五百人とされる。

大勢の参詣人が回廊を歩いている。東西の羅漢堂に納められている羅漢様を拝観するためである。回廊はゆっくり参拝する人達のための板張り通路と旅人が土足のまま参拝できる通路に分かれている。見上げると四段一列に並ぶ等身大の羅漢像は、一体一体、姿も表情も異なり、迫力に満ちている。羅漢様は、それぞれ異なる釈迦の教えを口にしていて、松雲元慶は、仏師を志し、豊前中津にある羅漢寺で天啓を得、四十歳で江戸に出る。そして托鉢で資金を集め、独力で五百羅漢像を彫り上げた。天才と言えようが、神がかり的な業績である。雪旦は、江戸名所図会で十頁にわたりこの光景を克明に描き、編集者の斉藤月岑は、配列順に尊者の名を記録している。

羅漢寺のもうひとつの名所が「さざゑ堂」である。表門の左に建つ三階建ての建物で入り口に入ると右回りに螺旋スロープを登り、高樓に辿り着く。降りるときには反対にある

◆雪旦画 江戸名所図会 羅漢寺全景 左羅漢道と茶屋、道に沿ってコの字に総門、さざゑ堂、西羅漢堂、正面本堂、右東羅漢堂が並ぶ。右後方に堅川五つ目渡し場が描かれている



◆北斎画 富嶽三十六景 羅漢寺さざゑ堂から見る富士

別の螺旋スロープを下る。この特殊な螺旋構造がさざえ貝に似ているところから「さざえ堂」と人々は呼ぶようになった。正式の名は三匠堂さんしやうどうと云い、堂内には百体の観音像が安置されていた。羅漢寺の周囲が田園のため、最上の高樓からの眺めは絶景で、北斎はここから眺望する富士を富嶽三十六景に描いている。人々は欄干にもたれ、遠方の富士の姿に見とれている。しかし、この堂も安政二年の大地震で倒壊。明治になって羅漢寺は、五百羅漢寺として目黒に再興された。松雲の羅漢像は三百五体に減ったが拝観する人々の心に感銘を与え続けている。境内には八代將軍吉宗の大きな腰掛け石も残されている。

羅漢道をそのまま南に下れば小名木川にぶつかる。すなわち羅漢寺は堅川と小名木川にはさまれた田園地帯に忽然と在ったのである。

江戸湊

日本橋川、豊海橋を潜るとそこは滔々たうとうと流れる大川（隅田川）である。この豊海橋から大川沿いに南へ下る。豊海橋の左手は御船手番所。そこから対岸の深川佐賀町まで長い、長い永代橋が架かっている。絶景である。豊海橋を南に渡ると、新堀町、塩町、浜町の家並み。大川沿いに歩くと新川に架かる三の橋に出る。新川沿いには、下り酒を扱う酒問屋が建ち並び、酒の香りが立ちこめている。嘗ては江戸初期の豪商、河村瑞賢の大邸宅があった。三の橋を南に渡るといよいよ広大な霊巖島である。安政年間には越前、松平慶永（春嶽）の三万坪に及ぶ中屋敷が大部分を占めている。霊巖上人が初めて当地に霊巖寺を建立したが、寺は明暦の大火で焼け落ち、深川に移転。地名の元になった。安政年間では、松平の中屋敷を大川からの入堀がぐるりと囲み、道もこの堀に沿っている。屋敷南側の入

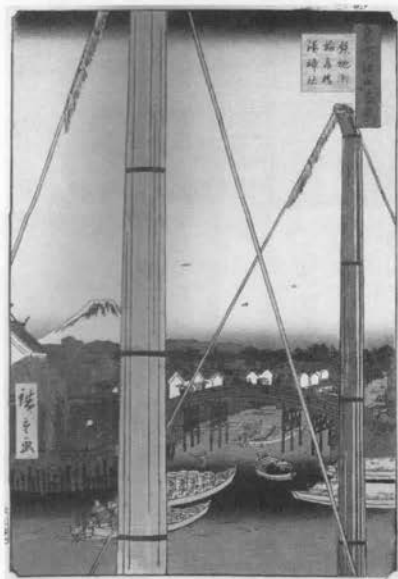
て京橋川を西にまっすぐ行けば江戸城に行く。右手の高橋を潜って越前堀を北に行けば、右に将監河岸を眺め、左に亀島河岸、八丁堀の役人宅を見て日本橋川、靈巖橋に出る。

関西方面からの物資は「下りもの」と呼ばれ珍重された。特に灘、伏見の酒は下り酒と云われ、上物とされた。そこから出た俗語が「下らない」である。広重の「鉄砲洲稲荷橋湊神社」の絵は真に美しく江戸の面影を映している。湊神社は通称、湊稲荷あるいは波除け稲荷と呼ばれ、ここで小型船への荷物の積み替えが行われるので船頭仲間に厚く崇敬された（明治になって若干、南に移され、鉄砲洲稲荷）。

湊稲荷（湊神社）の鉄砲洲富士（富士信仰、人工の富士）を左に見て稲荷橋を潜ると京橋川。左右は八丁堀河岸である。すると楓川にぶつかる。舟を河岸沿いに右に曲げ、楓川を北上すると日本橋川に繋がるちよっと手前に海賊橋がある。この名も向井将監に絡んでい

る。江戸初期には水軍、向井の屋敷が橋の右手にあった。その南に隣接して九鬼水軍の上屋敷があり、江戸湊を防備する嘗ての水軍村の感がある。江戸の海を固める、家康の江戸造りの構想が伺える。幕末になると向井の居屋敷は御厩河岸東の北本所馬場町に移されている（二千五百坪）。とにかく大川から江戸湊周囲には将監と名のつく橋や河岸が多くあった。増上寺西蓮社沿い、金杉川（古川）に

◆広重「鉄砲洲稲荷橋湊神社」
江戸湊から京橋川に入る船。
左手湊神社。京橋川の先が江戸城。



架かる將監橋もその一つである。大川端各所にある御舟蔵も「將監蔵」と呼ばれていた。

向井將監

向井將監しやうげんとは何ものであろうか。向井忠勝は天正十年の生まれ。大坂冬の陣では水軍の將として九鬼守隆とともに豊臣水軍を蹴散らし、大坂湾の制海権を押さえた。その功は家康の目に深くとまる。それにまして彼を重視したのは二代秀忠である。松本城攻略の頃から秀忠の忠臣であつた関係で舟を使つての移動の際には必ず忠勝が側に居た。寛永になると相模、上総の両国で実に六千石と旗本としては異例の大身になっている。造船の名手でもあり、三代家光は幕府最大の御座舟「安宅丸」(天下丸)を造らせている。そして忠勝以降、向井家の歴代当主は幕末に至るまで「左近衛將監」と名乗り、船手奉行を世襲。代々向井將監として江戸の海からの警護、幕府水軍の総括者を任じる。江戸に関わる海の

防衛。すなわち下総(浦安)の陣屋、相模(三浦半島)の要所も向井家の管轄であつた。最後の九代目向井將監正義は、勝海舟とともに軍艦操練所の初代頭取となつている。

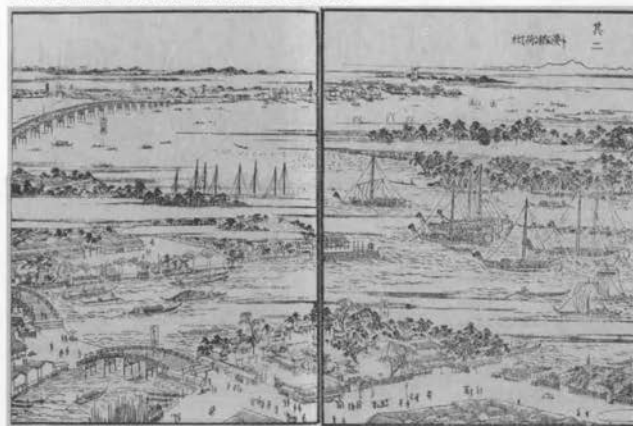
將監と名乗つたのは忠勝からであるが、親父の向井正綱は傑出した人物であつた。向井家は海賊(水軍)で武田氏滅亡の前には、武田水軍として活躍している。武田氏滅亡後、いち早く向井に目をつけたのが家康である。豊臣方二十二万の途方もない大軍が北条氏に襲いかかる。小田原城攻略。この時、規模に優る、北条水軍を駿河湾にて食い止めたのが正綱で、その合理的な海戦手法は駿河を委された家康に畏敬の念を持つて組み入れられる。やがて大坂の陣。豊臣水軍を粉砕し、大坂湾の制海権を確保する。このとき、幼少期から舟に乗り海戦教育されて育つた、長男の忠勝も活躍している。正綱の風を読むだけで方向を決められた天才的な力量を忠勝も受け継ぐ。正綱は家康の命で白杵に飛ぶ。難破し

たポルトガル船の修理。やがてヤン・ヨーステン（八重洲の語源）やウィリアム・アダムス（三浦按針）との交流が始まる。慶長六年（二六〇二）、忠勝は父正綱が預かっていた御座船「国一丸」を預かり、家康を送迎する御召し船奉行に就き、三浦半島の走水、三崎さらには江戸の各所に上屋敷、下屋敷、船番所役宅を与えられ、大坂の陣の功績により正綱を上回る三千石の大身となる。つまり、家康は江戸建設の海の守りの全てを向井の力量に託したのである。そして二代秀忠も家康の意志を受け継ぐどころか、さらに忠勝を厚遇し、身分は旗本ながら六千石を与えた。結局、明治の日本海軍の重要な拠点、横須賀から江戸湊（築地の海軍兵学校、大学校、経理学校、軍医学校）までの、海の江戸防衛路線は、この時、造られ、その中心に向井家が居たことになる。

鉄砲州

稲荷橋を渡ると左に湊稲荷の社とその後ろに小高い鉄砲州富士（富士信仰）が聳えてい

◆江戸名所図会上巻 湊稲荷社
左上永代橋。左中、将監河岸、将監組屋敷。
左下稲荷橋。中央下、稲荷社と人工富士。



る。海に突き出た稲荷の敷地は広い方形で、西と南沿いに、くの字の道があり、これは大川に沿って南に下っている。鉄砲州富士をデイフォルメして、ぐんと高く描かれている浮世絵もある。事実、江戸の船乗りにとりこの人工富士は、大いなる目印でもあった。雪旦はこの光景を陸地から江戸湊に向かって描いている。江戸湊には菱垣廻船が並び、石川島の遠方には、多くの帆立船が魚を獲っている。左に目を転じると永代橋が細長く連なり、深川、越中島。さらに遠くに房総の山が見える。この位置から、永代橋から手前に目を引くと、靈巖島に続く将監河岸、向井将監御船手組屋敷が見える（絵の左中央）。そして越前堀と京橋川分岐には高橋と稲荷橋が描かれている。様々な舟が行き交い、広々とした光景である。湊稲荷を囲む道は結構広く、人通りがあり、武士の乗り籠も見える。

大川に沿って南に下る。鉄砲洲である。大川沿いは湊河岸の光景。河岸には材木が積み

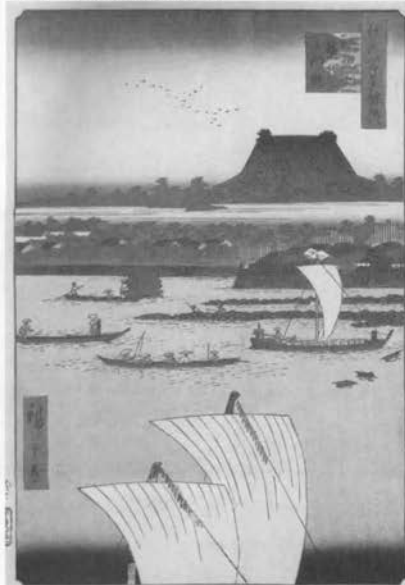
立てられている。道の手前は鉄砲州本湊町の家並みで、正面に佃島が見える。その間には多くの荷物舟が行き交っている。家康入府の時には、ここは南北に細長い洲であった。それが鉄砲の形をしていたから鉄砲州と呼ばれるようになったとか。あるいは、ここで鉄砲の射撃訓練を行ったところから鉄砲州としたとか、その名の由来には諸説在る。いずれにせよ、霞がしげる州を埋立て、土地を造成したわけである（築地）。この工事は明暦の大火以降、拍車がかけられる。一種の火除け地として大名屋敷や町屋を拡散させたのである。さらに南に下ると、鉄砲洲川の小橋を渡り、船松町に入る。この橋を渡ったところから「佃の渡し」が出ていた。橋を渡る手前からは、石川島人足寄せ場に行く「寄せ場の渡し」があった。船松町の大川沿いは船松河岸となる。さらに歩くと十間町、明石町と続く。ここまで鉄砲の形をした島のように見える。この大川沿いの道を、吉良上野介を討ち取った

忠臣蔵の面々も通ったのであろう。明石町の先端を右に曲がり、明石橋を渡る。火除け地とも思える広場があり、左に曲がると南飯田町、上柳原町と続き、講武所（安政三年三月開所、軍艦練所）の塀にぶつかる。塀に沿って右に歩けば本願寺である（現、勝鬨橋から銀座方向に入った晴海通り）。講武所の南側は築地川が流れており、江戸湊から安芸橋を潜ると右側に波除稲荷がある（稲荷は現存、この辺り一部川が残っている）。この川の左一帯には、一橋慶喜の抱え屋敷、松平越中守、海沿いに松平安芸守（浅野）下屋敷が見える。現在の中央卸売市場である。江戸末期、明石橋から講武所までの一帯はちょうど長方形の島のように、その裏手に広大な築地本願寺があった。

広重は、江戸湊からこの辺りの情景を描く。「鉄砲州築地門跡^{もんぜき}」。本願寺の屋根は飛び抜けて高く聳え、船頭の目印になった。浄土真宗京都西本願寺は元浅草御門近くにあったが明

暦の大火で焼け落ちる。信徒は築地の埋立に協力し、ここに西本願寺を再建。築地御坊、あるいは築地門跡と呼ぶようになる。絵の中央、右の石垣の上に明石町の家並み、左の石垣が南飯田町。石垣の中央を割って右に入り、明石橋を潜ると築地川と鉄砲州が合流する広い入り江になっている。明石河岸には材木が立ち並ぶ。手前の江戸湊では帆をかけた荷船に混じって釣り人が糸を垂らし、投網を投じている漁師も描かれている。人々が住まいす

◆広重「鉄砲州築地門跡」



る眼前の海がキス、ハゼ、カマス、カレイなどが獲れる江戸有数の漁場であった。

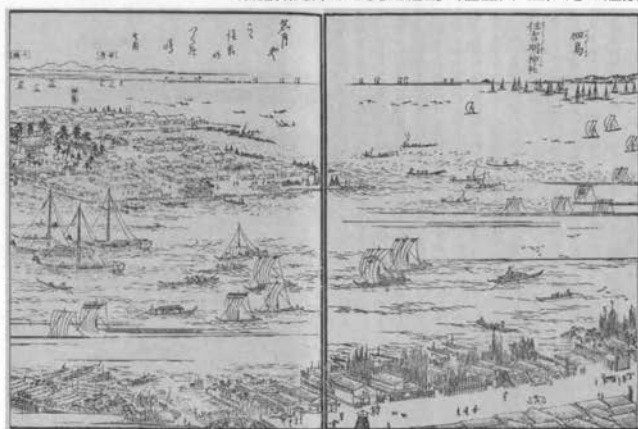
佃島

鉄砲州の丁度正面に見える島が佃島である。雪旦の江戸名所図会は、この光景を見事に表現している。左下に描かれている鉄砲州川の河口左岸には、繋がれている佃の渡し舟が描かれ、眼前に行き交う帆掛け船や荷船、遊覧船でごった返す中を縫って、その先、長方形の佃島北角に船着き場が見える。有名な佃の渡しである。その左に見えるのが住吉社で隣の石川島との間の入り江に立つ。もうひとつ細長い島が橋一つで繋がっている。島の背後、右手には江戸湾が広がり、無数の舟が描かれている。島の遠くには安房の山々が見渡せる。寄り添うように漁師の自宅が並び、数えられるほどである。芭蕉の門人、宝井其角の句が寄せられている。「名月やここ住吉のつくだじま」。余程、月見の名所であった

のだろう。

摂津国佃村（大坂）の漁民と家康の関係は深い。本能寺の変後、あるいは大坂の陣。各所で家康は佃漁民の協力を得ている。江戸入

◆江戸名所図会上巻 雪旦「佃島」
鉄砲州河岸から見た佃島（左上）、江戸湾の遠景



府後、家康は世話になった漁民を江戸に呼び寄せ、日本橋魚河岸近辺に住ませ、江戸の漁業振興をまかせる。その頃、佃島は広い江戸の海にうつすらと姿を見せる寄洲^{よりす}であった。寄州には葭が生え、鳥が飛び交っている。この州に漁民総出で百間四方の埋め立て工事が始まる。家を建て此処に移り住むと故郷の、海上の守護神、住吉神社（田蓑神社。祭神は住吉三神）から分霊し、住吉社を建立。故郷佃村にちなんでこの地を佃島と呼ぶようになった。周囲は、豊穡の海。佃漁民の活躍は目覚ましく、漁ではとりわけ白魚漁が有名。捕れた魚は將軍家にまず納め、残りは江戸市民に分配。日本橋魚河岸の隆盛に一役買っている。漁民は本願寺の信仰が厚く、明暦大火後に始まった築地の造成、築地本願寺の移転、再興に尽くしている。住吉神社の夏の祭礼は壮麗で広重も「佃しま住吉の祭」で、裸の若衆が大きな神輿を担いで海中を練り歩く壮観な姿を描いている。絵の中央に住吉大明神の

幟が立っている。そして佃の漁民は、獲れた魚介類を醤油、味噌などで煮染めた保存食「佃煮」を生み出した。これは自家用の保存食として開発したものである。江戸時代、佃島は江戸湾にぽっかりと浮かんでいる。明治になって南への埋立工事はさらに進み、広大な月島が誕生する。

【参考文献】

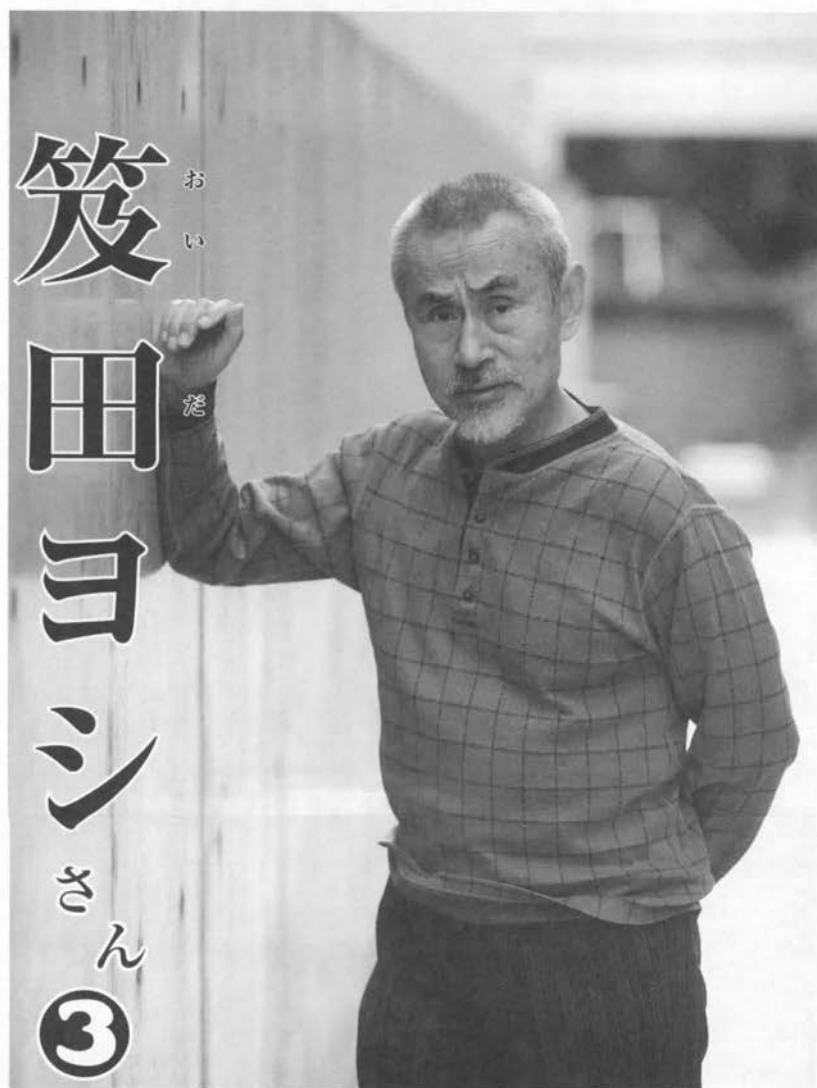
「江戸名所図会」角川書店
「広重の大江戸名所百景散歩」人文社
「江戸明治東京重ね地図」
「見知らぬ海へ」隆慶一郎
その他

◆広重絵 「佃しま住吉の祭」



連 載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

笈田さんは演出の勉強をするためにははるるとピーター・ブルックの元に出かけて行っただけだけれど、だんだんとその偉大さに圧倒され始める。

「俳優として出演しながら見ていると、こんな素晴らしい演出家がいるんだから、どうして僕が必要があるんだ、って思えてくる。師匠というのはあんまり立派すぎるとお弟子は勇気を失くしますね。この師匠をいつか追い抜けるか、と思わせるくらいがちょうどいい師匠なんだね（笑）。『マハーバーラタ』に出てから特にそう思った。僕が台本を読んでいる段階で思いも及ばなかった素敵な演出のアイディアを随所に見せられて、参ったと思いましたからね」

『マハーバーラタ』は古代インドの膨大な叙事詩で、これをジャン・クロード・カリエールがまずフランス語で戯曲化した。笈田さんと木下長宏氏の共訳による日本語版（白水社刊）を今回私は通読して、昭和六十三年の夏

に現在のル・テアトル銀座で観た長い長いこの芝居をつぶさに思い出し、ようやく全貌がつかめた気がして非常に面白かった。ただし日本での上演台本はピーター・ブルック自身の訳による英語版が用いられた。

笈田さんはこのとき武術の達人で崇高な精神の持ち主、ドローナと、大袈裟な動きが滑稽な悪役、將軍キツチャカのふた役を演じていたが、終盤、ドローナが血まみれになって壮烈な戦死を遂げる場面には強い衝撃を受けたものだった。

「ああ、あそこも卓抜な演出でしたね。大きな壺に血のような赤い果汁がいつぱい入って、地面の上に座ったドローナが両手でそれをグーッと持ち上げて、自分で頭からかぶる。この時点でもう魂は彼の肉体から抜け出していて、それから首を斬られると静かに前に倒れる、という演出。血を大量に流して死ぬというショッキングなイメージを、こんなシュールな方法で表現するなんて、すごいなと思



マハーバーラタに出演した蒔田さん

いましたよ」

ドローナは、のちに争うことになる二つの部族の双方の王子たちを教育する賢者にして武芸者。最初、小さな袋を一つ下げただけの「貧しげな五十がらみの男」として登場してくる瞬間から、笈田さんの鍛え抜かれた瘦身がただ者ならぬ雰囲気濃厚にかもし出していた。

「芝居って、元々お話をお客に語って聞かせるものなんだけど、昔々は語り部とか、琵琶法師とか、吟遊詩人とかが一人で音楽と言葉を使ってお話を伝えてた。それが芝居ってものになってくると人数が増えて、それぞれが語り手だし、動きが加わってくる。すると演出家というものが必要になってきます。演出家にもいろんなタイプがあつて、今回の『春琴』のサイモン・バクマーニーは、絵面で物語を伝えようとする人でした。人間で見せるよりも、装置とか衣裳とか照明とかのビジュ

アルなものに工夫を凝らして、絵物語で見せようとするタイプですよ。数年前の『四谷怪談』のヨッシ・ヴィーラーに至っては、彼が単に東洋的なエキゾシズムに触ってみたかっただけ、としか思えない。地下鉄のホームという意外な舞台装置で何を表現したかったのか、狙いもはっきりしないし、そんな見た目の趣向の奇抜さは五分間で飽きますからね。ところがピーター・ブルックは、総て視覚的なものは取り除いて、人間と人間の関係、そこに生じる微妙なたゆたいを見せることで語ってゆく。だから役者の責任は非常に重くなるわけですよ」

笈田さんは人間が大好きなので、従ってアニメーション映画はあまり好きじゃない、という。

「あれは生きた人間が動いて演じてませんか。どんな映画でも人間がやっていると、たとえヘタクソな演技でも、あ、あいつ今一生懸命きれいに見せようと思ってるな、とか

(笑)、人間の内面が表に出てくるのが面白いんですよ。演劇、映画を通じて僕が一番の興味は、人間てなんて神秘的なんだろう、なんてバカなんだろう、なんて美しいんだろう……と思うこと。人を見てるとまったく飽きるということがありません」

笈田さんはここ数年、海外のオペラの演出で活躍している。人間への興味が基になる仕事だから、苦悩しながらも楽しいに違いない。「ヴェルディの『ナブッコ』を演出したことがあったけど、それはユダヤ神の奇蹟を語るのに音楽がまるで安物のブロードウェイミュージカルみたいで好きじゃなかった。ヴェルディ、ロッシーニ、プッチーニのいかにもオペラって感じの作品にはあまり興味がありません。この間、トロントでプリテンの『ヴェニスに死す』を取り上げましたけど、これは比較的気に入ってます。原作は、著名な老作家がある一人の少年の若さに恋をして、狂ったようになるというトーマス・マンの小説で、

それを以前ヴィスコンティが映画化しました。しかし実際に美少年が画面に出てくると老作家が恋した少年はこんなじゃなかったと思ってしまうのですよ。つまり小説だと、読者がそれぞれ勝手にその少年をイメージしますが、映画や舞台では実際に誰かが演じるわけですから観客は自分の想像とは違っていて不満足を感じます。そもそもこの作品は、功成り名を遂げた老作家が残りの人生をどう生きて死んでゆくかというのがテーマで、少年は老作家が人生最後の情熱を傾ける若さの象徴でなければなりません。そこでこの少年を誰が演じてどう登場させるか……。さんざん考えた結果、少年はずつと後ろ向きにしたいんです」なるほど。いいアイディアだと思う。

「オペラ演出の仕事は、まず戯曲を読み解いてどう解釈するか。それによって時代をどう設定するか、衣裳、舞台装置はどうするかと、次々に決めていきます。モーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』も演出しましたが、僕は

どうもあの時代の恰好がいやだったんで、現代の衣裳にしたいと思った。するとどうしても御主人様とかセニョールとかいうせりふの辻褃が合わなくなる。人を殺しても平気でいられる貴族階級というのも現代には存在しないですしね。これも皆さん考えて、イタリアのマフィアのドラ息子の話にした。彼を取り巻く三人の女性の男に対する接し方がそれぞれ違って面白いんで、ドン・ジョヴァンニのほうを一つのエレメントとしてしまったわけです」

笈田さんは今、ビゼーの『真珠取り』に取り組んでいて、来年六月にパリのオペラコミックで初日を迎えることが決まっている。

「原作はスリランカの南の島の話ですけど、僕は沖繩の南に舞台を置き換えようと思っています。ほかに『マラーの『大地の歌』やシユールベルトの『冬の旅』も、歌のお話を組み合わせて、オペラみたいにして上演してきました」

このところ、現代演劇が「演出家の時代」と言われるようになって久しい。演出家への信頼が、俳優も客も集める。幕があいてしまえば演出家の姿は見えないが、絶えずその存在は劇場内を圧倒する。笈田さん演出のオペラを是非観たいものだ。

「姿が見えないと言えば、僕は四、五歳のころ忍術使いになったかったんです（笑）。エノケン（榎本健二）の『猿飛佐助』という映画があつて、大きなシャモジみたいなものを持って、呪文を唱えると音楽が鳴つて、マグネシウムがボンとたかれて白い煙が出て、エノケンの姿が消えるんです。僕があんまり興奮して喜ぶものだから、母親が黒い風呂敷の両脇を縫つて袋を作つてくれて、この中へ入りなさい、つて。あら、ヨシオ、どこ行つたの？ ヨシオ！ それでパツと出ると、あ、そこにいたの、つて。僕も本当に消えてるとは思わなかったけど、この遊びが気に入つて、

三島由紀夫にとっても似ていた筈田さん



一人で嬉しがつてました。ある日おふくろの友だちが来たんで、さっそく袋にかくれたわけですよ。あら、ヨシオ、どこ行つたの？ って母親がやつてくれたら、無粋な友だちはそこにいるじゃないの、つて指さして（笑）、それ以来この忍術ごっこはやめました」

そういう観客に來られては、演出家も俳優もひとたまりもない。

「物ごころついて僕が最初にやりたかったことは消えることだったのに、それがどうして姿を見せる役者になつたのか、考えてみたことがあります。すると役者も、本当は舞台で自分を消さなきゃいけないんだ、ということに気づいたんです。うまかった、と人に言われたら、しまった、と思う。それはテクニクだから。一生懸命演じてる自分を消してない、つてことだから。僕たちの本当の仕事というのは、舞台で見えるものを通じて、そこに見えないものを表現する、つてことだと思ふんです。役者としても演出家としても、僕

のチャレンジは、今お客に見せてるけれども、その見えるものを通り越して、そこから別の何かが見えてくる、ってことなんです」

年齢を重ねて、毎年いろんな発見がある、と笈田さんは言う。

「昔は役者としてずいぶん恥ずかしいこともしてたなあ、というのがこのごろよくわかるんです。年取っていくのも悪くないな、と思ってます」

パリへ帰ってから、言い忘れたことがある、と笈田さんから電話があつた。

「名優六代目菊五郎の御子息、尾上九朗右衛門さんに会ったことがあるんです。ニューヨークでワークシヨップをなさっていた時だったと思います。六代目から彼が教わった話でしたけど、非常に感銘を受けました。あの月をこらんよ、って空を指さすときに、そのときの身体の使い方や角度、形は教えてやれるけれども、指先からお月様までの距離はお前さんの責任だよ、って言われた。お客にお月

様が見えなきや話にならない、ってことですよ。ね。つまり、芝居は見てくれがよくないやいけないが、見てくれを通じて見えないものが現れてくるのがいい演劇、ってことなんだと思う。これは六代目菊五郎の言葉から僕が教わったことで、生涯の探求課題だと思っています」

電話を切って、笈田さんの著書『俳優漂流』の中に、電話の呼び出し音について書かれた一節があつたのを思い出した。国によつてそれぞれ違う音がするのだそうで、あ、日本の音、あ、イギリスの音、となつかしく感じる、とあつた。また、夜中にふと目ざめて、瞬間自分がどこに寝ているのか見当がつかず、宙に浮いているような恐怖にみまわれることがある、という件りもあつた。

でも、強靱な精神力の持ち主である笈田さんは、今日も求道者のように、理想の演劇について考えを巡らしていることだろう。

(この項おわり)

末代の衆生を往生極樂の機にあててみるに、行すくなしとても疑うべからず。一念十念に足りぬべし。

法然上人「二紙小消息」

乱れきった末法の時代、さらにはそれ以降の時代に生きる人々が阿弥陀仏の極樂浄土へ往生を遂げ得るか否か、という疑問について考えてみますに、称えるお念仏の数が少ないからといって往生が叶わないなどと疑ってはいけません。阿弥陀さまの本願のお力は、たとえ十声あるいは一声のお念仏であったとしても往生を叶えて下さるのです。

「たった」が「やっと」なんです

浄土宗には「ナムアマミダブ」と十遍お念仏を称える「十念」という作法がある。法要を勤めるなか、その区切り区切りに称えられる。称えるスピードにもよるが、たいてい、「ナムアマミダブ」を四遍称えて息を継ぎ、もう一度四遍、九遍目を「ナムアマミダブ」と「ツ」をつけ、最後に「ナムアマミダブ」と収める。十遍念仏を称えれば極楽往生が叶うという『無量寿経』の所説にもとづくこのお作法、法要ばかりでなく、誰が、いつ、どこで称えても構わない。

たった十遍の念仏。でも、その十遍が称えられなかったことがあった。

とある日曜。あるお寺さんの法要で、法話を勤めた時のことだ。話を始めるに当たり、仕来りに従って十念を称える。「ナムアマミダブ」を四遍一息に称えるはずの念仏が、「ナムアマミダブ、ナムアマミダブ、ナムアミ」と三遍目の途中から息が切れる。たった四遍の念仏なのに、二遍がやっと。あとは息が足らず声にならない。慌てて息を継いだが、やっとの思いで十遍を称えた。

じつは、体調が悪かった。その前々日の金曜の晩、腹部にこれまでにない激痛を覚えた。耐えかねる痛みと浅くなる呼吸。妻の問い掛けにもまともに応えられず、救急病院に駆け込んだ。検査の結果、帰宅して様子を見ることになった。

翌朝、多少痛みが和らいだ。当の日曜、何とか法話の席に着き、勤めあげたものの、件の通り十念ができない。尋常でないと思った。週が明けての月曜、朝一番で近所の病院の診察を受けた。診断は重症であった。三日間、朝から晩まで病院のベッドで点滴。入院に等しかった。さらに三日間、自宅での安静。急変から快復まで十日余りを要した。

念仏を称えて極楽往生を叶えるという浄土宗の教えは、そもそも阿弥陀さまが定めたようなもの。その念仏には、他のいかなる修行も比較にならない大いなる功德があるという。大いなる功德とは極楽往生のこと。十遍でも一遍でも称えさえすれば、誰でも、その功德が得られる。そうなるよう念仏に、阿弥陀さまご自身がいわば仕込みをした。それだけの功德を宿したのだ。

この「一」や「十」という数を、それまで、「たった」の一遍や十遍と理解してきた。もちろん間違いでない。念仏の大いなる功德が強調され、ひいては阿弥陀仏ご自身に具わる功德もまた強調されることになるからだ。

でも人間、その「たった」が「やっと」になる時がある。呼吸すること、寝返りを打つこと、トイレへの往来。ことごとく痛みが伴う。やっとなのだ。その「やっと」が自信を喪失させ、「病状がもっと悪化するかも」と不安を煽る。

あの晩、激痛にのたうちまわりながら、念仏に頼ろうとした。しかし、たった一遍の念仏が声にならない。頼みの綱のはずの念仏が、何ともか細く、かえって己の深刻な病状を思い知らせているかのようには思えた。

でも、だからこそと思うのだ。阿弥陀さまが、たった一遍の念仏に極楽往生が叶うよう大いなる功德を宿されたのは、逝く人の不安を取り除くためなのではなからうか。最後の一息、やっと称えた一遍が何とも頼りない念仏であったとしても、間違ひなく往生が叶う。だから自信を持って信じなさい、安心なさい、と。

我々の眼に極楽は見えない。見えないものは信じるか、信じないかだ。極楽はある、往生は叶うと信じる自分でいたいなら、念仏を称えて、その証とするしかない。最後の一息の念仏が、どんなお称えになろうとも、それを以て極楽往生を信じている証とする。声になろうがなるまいが、その証として受け止める。

「たった」だけでも「やっと」の念仏。最後、どんな念仏になろうとも、極楽往生を信じる己であるべし。「一念十念に足りぬべし」とは、そんな教えだと思うのだ。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

「法然上人をめぐる人々」

師を慕う

親鸞

石丸晶子

挿画・佐野芳朗



新連載
第一回

建暦元年の冬——

建暦元年（一二二一）の冬、豪雪地帯といわれる越後の国府竹ノ内は、数年に一度という大吹雪に見舞われていた。だが、その厳しい冬も晦日となり、あと一日で終わろうとしていた。

居多の浜から吹き付ける吹雪の中を、降り積もった雪を掻き分け掻き分け、村人たちが総出で造った細い道が集落の家々の戸口に通じている。歳末の慌しさを見せて、細い雪道を行き交っていた村人の姿は、陽が落ちるとともに絶えた。

家々の中では、一年の締めくくりを迎えたそれぞれの家族の賑わいがあったが、日中、日本海から吹き付ける風をうけて荒れ狂うように唸っていた大吹雪は、日が落ちるとともに静まった。雪一色につつまれた外の世界は今、深い沈黙につつまれている。

ときどき、その沈黙を破って、木の枝に降

り積もった雪が、バサツと雪の地面に落ちる音がした。

親鸞一家にとって、五度目の冬が終わろうとしていた。

建永の法難（一二〇七）でこの地に流罪となっていた親鸞に、都で赦免の勅令が下ったのは四十日余り前の十一月十七日である。そして順徳天皇の赦免状を持った勅使範光が、雪と吹雪のなかを十六日間の行程をかけて、雪一色に覆われた竹ノ内国府の親鸞の草庵に到着したのは十二月二日であった。

赦免状を受け、今まで閉ざされていた未来が突然、広々と明るく開けてきた開放感のなかで、しかしまず親鸞の心に広がったのは師法然上人のことであった。

「法然上人様はいかがお過ごしであらせられます」

赦免の請文をしたため、その奥に「愚禿親鸞」と署名して勅使に捧げ終わると、親鸞は

尋ねた。

「愚禿親鸞」。

越後に来て以来、それまでの名善信を改めて、彼は「愚禿親鸞」と名乗るようになっていた。流罪にさいして僧籍を剥奪された彼が朝廷から新たに与えられた名前は「藤井善信」であつたが、越後に来て以来、名前をみずから「親鸞」と改め、僧でもなくしかし世俗の人間でもない「非僧非俗の親鸞」として、「親鸞」の上に「愚禿」を冠せて「愚禿親鸞」とみずから名乗つたのである。

辛いといえは今年三十九歳の親鸞にとつても、流人の暮らしは容易ではなかつた。

竹ノ内の天台宗寺院五智如来の境内一隅に設えられた二間の草庵が流人親鸞の住居であつたが、一家が食する米が尽きて托鉢に頼らねばならぬことも度々。里に下りては根芹を摘み、野草を摘んで飢えを凌いだ日も多かつた。

そうであればこそ、法然上人は七十九歳に

おなりの筈。五年に及ぶ流人のお暮らしはどんなにか辛苦に満ちておられたらう。

親鸞自身流人の身であれば、師僧に便りを差し上げることでもできぬ日々であつたが、ご健勝のほどは如何であらうか。

二

「師僧にはご健勝であられましょうか」

かさねて親鸞は尋ねた。この五年間、越後にあつてなお、師僧法然上人を忘れた日はなかつた。

「法然上人のご赦免も親鸞殿と同日に発せられました。お上人様の赦免を伝える勅使も、私と同時に都を發つております。ただし、お上人ご滞在の勝尾寺は都に近うございますれば、もはや都にお入りになつておられるのはありますまいか」

流人であつた人とはいえ、親鸞は高德の誉れ高く上下貴賤あらゆる階層の人々から慕われた法然上人の高弟である。後鳥羽上皇に仕

える女房が法然上人のお弟子に帰依したという一時の激怒から、上皇は法然上人や親鸞などを流刑に処したが、それはまことに理不尽なことではなかったか……。

建永の法難といわれるこの事件に關して、法然上人の側には何の落ち度もないと心中では思い、深く同情していた勅使範光のことばは丁寧であった。

「おお、さればすでに、あの吉水の草庵にお帰りか」

「いや、主を失って以来、草庵は荒れ果てております。元の草庵にはお帰りになれますまい」

範光はことばを切ると、

「しかし法蓮房様はじめ流罪を免れた都のお弟子たちは、この年月、法然上人ご帰京の日を心待ちして一つになっておられたと聞いております。お上人様赦免後のお住まいも、法蓮房様などは早くから考えておられたに違いありません」

法蓮房。懐かしい兄弟子の名であった。即刻、都に行つて法然上人にまみえたい衝動が親鸞の全身を走った。

（都に行かねばならぬ。師僧にまみえ、ご健勝のさまをこの眼で確かめねば）

溢れる思いが親鸞の胸を交錯した。

（讃岐で、そして箕面の勝尾寺での流人の日々。ご高齡の師僧にはどんなにご苦労多い月日であられたろう。それから、親鸞の越後に在った日々の積もる思いも師僧に聞いていただきたい）親鸞はひとと範光の顔に視線を当てた。と、範光は、

「それにしても、ここは国府とはいえ、都で想像していた以上の鄙ひなびた田舎でございますな。五年におよぶこの地でのお暮らし、さぞお辛いことが多くありましたらう。お察しいたします」

「いや、そのことよりも、ご高齡の師僧の御身が案じられます」

範光は頷きながら、それには答えず、

「雪深い里であることは聞き知っておりまして、何とも道中難儀しました」

「……」

「びわ湖と日本海の水運を使えば越後には七、八日で着くところを、時化で船が出ず、すべて陸路でしたからな」

「――今年の冬は時化がつつき、越後ではどの港も閉ざされていると聞いております。道中のご苦労、さぞ大変でございました」

三

そう範光のことばに応じながら、親鸞の胸はこの五年間、片時も忘れた日とてない法然上人への思いで溢れかえっていた。

親鸞の目から一筋の涙が頬を伝った。すでに、京に在って師僧に対面しているかのような感激が胸からこみ上げてくる。

「ご赦免に与りましたからには、早速にも都へ上り、師僧のもとに馳せ参じる心でございます」

親鸞はいった。

「この時化では道中難儀されようが、法然上人も親鸞殿の上洛をお待ちかもしれぬ。そうなさるがよろしかろう」

範光が答えた。

赤子の泣き声でした。

ハッとして親鸞は土間に目をやった。

今年三月に生まれた乳飲み子を物陰で妻の恵信があやしている。

――親鸞には家族がいるのであった。

「おお、赤子がおいでか」

土間に視線を送ると範光がいった。

「忘れていたが、妻をお持ちであったな」

悪意のない口調でつぶやくようにいった。と、しきりに頷きながら、

「お子は何人おられる」

「三人にございます」

「では五人のご家族か。家族をもつての流人生活はさぞ大変でありましたろう」

流罪になる以前、在京時代から親鸞は恵信



と結婚。妻子を持つ身であった。

出家の身でありながら妻を持ち、子を挙げたことを親鸞は恥じてはいなかった。

九歳から二十九歳までの二十年間、叡山横川^{えんざんよこがわ}の堂僧として厳しい修行に明け暮れた親鸞であったが、人間存在と人生の謎は深まるばかり。自分がなぜ僧となつて叡山にいるのか、日を追うことに無明^{むみょう}の闇に閉ざされていく月日であった。

加えて、若い親鸞のからだは異性を求めて苦しんだ。

たとえ僧侶であっても、女性と交わることがなぜ罪深いことなのか。仏の教えとは、禁欲生活を送ることであり、異性を知らぬそのこと自体が、そんなに尊いことなのか。

ではなぜこの世には男と女が存在しているのであろう。女は僧侶を誘惑するために創造され、存在しているのか。

叡山の堂僧親鸞は苦しんだ。真如を求め、価値とは何かと問う苦しい求道の年月であった。

(つづく)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第二十四回

第二部

来江の古城遥かなり

自由思想団で并じ
僧院で禅味を楽しむ



男子修道院に 禅味を感じず

どちらかというと、カトリックについては手厳しい海旭であった。とくに、ローマの教皇の權威をかさにきて政治を裏から牛耳ろうとするその手法に、「中央党」という正式名称をつかわずあえて「坊主党」と悪しざまにのしつてはばからなかった。そんなカトリック嫌いにもかかわらず、海旭の一番の蟲屑（むしくず）はストラスブルクから一時間ほど南へいった、カプチン派の修道院で、ちよくちよく訪れた。神父は革新派というわけではなかったが、どことなくウマがあった。海旭の厳しいカトリック批判にもじつくり耳を傾け、仏教の教義についてもあれこれ質問をし理解しようともしてくれた。そんな教義問答上の交流もあるにはあったが、なによりもこの修道院の歴史あるたたずまいが、海旭の心をなぜか和ませる、それはどこか奈良斑鳩（いかるが）の古都巡礼の気分 に似たものがあつたのかもしれない。

女人禁制の厳格きわまりない修道院には、七十名ほどの修道僧と百五十人ほどの沙弥がいて、食料品はもちろんのこと、衣料や雑貨まで、すべてを自給自足している。そのため広大な畑にビールの醸造所まである。社会から完全に隔絶して一城郭の小宇宙をなして、建物から調度類はもちろん、応対の仕方まで、すべてが中世のままで時間がとまっている。

ビールの本場、南独のミュンヘンの某修道院からの直伝というビールが枯淡の味わいでうまい。これを昼間から飲りながら、入魂の神父とたわいもない話をして日がな半日をゆったりと過ごすのである。気が向いたら、腰をあげて、荘厳なゴシック様式の廊下に出ると、よいにおいがどこからともなく漂ってくる。仏教寺院の香とは違うのだが、なつかしさを覚える。本堂では聖書を暗誦し、聖母マリアを称える賛美歌が途切れ途切れに聞こえてくる。中庭に出ると、古びた石造りの十字架に紅葉がからみ、人の気配に気づいて落ち

葉の堆積から小鳥がふいに飛び立つ。まさに浮世の俗事をすべて忘れさせてくれる。それがここを最頂にしている一番の理由であった。

この間も中庭で神父とビールを飲りつつ、こんな会話をのどかにかわしたばかりだった。

「実は昨夜は自由思想団で、きみが帰依する旧教をやれ不寛容だ、やれ頑迷狭量だとかきおろしてきたが、こうしてここにきて、日がなほんやりしていると、実になごむ。ああ、いい気分だ」。海旭はビールをうまそうに飲むと、声を落として打ち明けた。「微醺を借りて白状するがね、神父、もし宗教の感化力を十のものとすると、そのうち一から二はこうした中世趣味、脱俗趣味ではないだろうか」「異教の僧から、お褒めに預かって恐縮だ」と神父はうけて問いを発した。「では、日本ではどうだ。こんなところはあるかね」「禅だろうか」と海旭は答えた。「それがわが日本国民の高雅な精神を涵養しているのだと、僕は思っている」

「なるほど、ZENか」と神父はうなずいた。円覚寺管長・釈宗演の英語による出版のおかげでZENは欧米の宗教家の間ではよく知られていた。「ということは、ワタナベ、きみは禅宗の信徒なのかね」

「いや、浄土宗の信徒だ。残念ながらいべきか、わが宗門はいささか禅味にはかけている。世俗にすぎる浄土真宗や法華宗ほどではないがね」。海旭は日本の仏教諸派の区別を説明して理解してもらうのは厄介と感じて話題を転じた。「神父、酒のおかげだろうか、いま、面白いことを思いついたよ」海旭はビールを神父のグラスについて、一息入れてからつぶけた。「アメリカはシカゴかニューヨークに幽玄なる禅寺をつくって木魚でも叩いたら、ヤンキーどもの干からびた根性も少しは人間らしいものになるのではないか」「おやおや」と神父は言い返した。「これは、ワタナベにしてはすいぶん世俗にすぎる」「たしかに。ヤンキーがどうなどという下世



話で禅の精神とはほど遠い。これはまいった。
異教の神父に一本とられたな」

二人は心底から笑いながら、ビールを飲み
干した。

海旭は帰路の電車のなかで、禅味あふれる

宗教問答を反芻はんすうしながら、胸中で満足げにつ
ぶやいたのだった。日本ではありえないこと
だ。いや異郷の地にあってもなかなかありえ
ないことだ。また、時間をつくって来よう。

(つづく)

浄土誌上句会

●会

（特選）会うときも別れるときもさくらかな 増田 信子

会うと言ひ別れるという。読者はこれをどこに置いてみるだろう。卒業する時に、入学の頃もそうだったと取るのも、これを入社退社に置くのもよからう。俳句は自分の手を離れれば、読者に任せるほかないのである。

（佳作）善光寺さまの白酒俱会一処

柴崎 征夫

基会所に少年ひとりいる遅日

斉田 仁

会えば親し卓にビールの瓶並ぶ

山口 信子

●期

（特選）種を蒔く期日記せし古日記

井村 善也

農業日誌というほどのものでなく、家庭菜園でもよい。種を蒔いた時、肥料をやった頃など、収穫までをその折々に記しておく。そ

の古い日記を開いて、あの頃はこんなものを
作っていたのだなどふり返っているのだ。

〔佳作〕

春宵や酔えば同期の応援歌

河合富美枝

春宵や同期の友と肩組んで

中島富士子

期日前投票にゆく春日傘

前田由美子

●自由題

〔特選〕

盆栽を褒めうんちくを聞かざるる

中村 真一

盆栽は形を整えていくのに、実に長い時間
を要するものがある。それだけに育てている
人は、それぞれ一家言を持っている。作者は
うっかり褒めたところから、長々とそれを聞
かされ、半ばうんざりしているのだろう。

〔佳作〕

四月馬鹿目玉動けば目のゴミも

小林 苑を

花の昼もぬけの町に犬眠る

石原 新

早蕨の産毛光りし谷明かり

佐藤 ゆう



誌上句会〈編集部選〉

■会

お茶会のひとときゆるむ夕桜
菖蒲田の彼岸の友の遠会釈
先に逝き父母と会う身ぞ我樂し
福島を南下してくる蝶に会う
ぶらんこに坐りて会議始まりぬ
まつさきに君に会いたしつばくらめ
五分咲きの花見の会の咳払い
会釈してどなたでしたか花満る
初蝶の吹かるる如く退会す
教会の門出て一歩青き踏む
満開を記念日とするクラス会
会釈して去りしは亡父か臘月

河合富美枝
中島富士子
飯島英徳
目黒 裕
村田 篠
間村俊一
井口吾郎
小林苑を
石原 新
浜口佳春
千駄木敏郎
鍋谷宗治

■期

納税期鴉がつつくゴミ袋
写楽展会期変更花一分
最期には匙一杯の蜆汁
卒業期駅に別れの数多かな
浅蛸下げ教師の帰る定期船
陽炎や期限の切れし乾電池
反抗期なくどんみりと花の昼

■自由題

八つ橋の淡きみどりや京の春
黄の花と見えし初蝶低く舞ふ
菫の煮しめ振れて花の昼
永き日の方位磁石の軽さかな
デカンシヨを吟じ合ふ友今はなし
待ち人は来たらず花はほころびぬ
空を見て悲し花見てなほ悲し
真四角な春の卵のあるとせよ
霊長類ヒト科しゃがんで花曇
足取りの軽き犬なり路の臺

斉田 仁
千駄木敏郎
鳥羽 梓
浜口佳春
増田信子
紺野 敬
江藤美美

河合富美枝
中島富士子
斉田 仁
村田 篠
森 懐人
井口 栞
工藤 掉
間村俊一
三宅月彦
山内桃児

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

季節ではありません

点灯自由題

締切・二〇一一年六月二十日

発表・『浄土』二〇一一年九月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

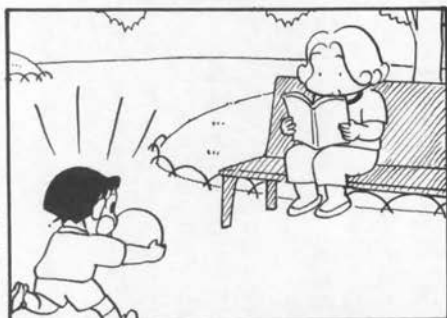
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

81

かい目

さっちゃんはネッ

かまち♡よろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)

雲重くだんだんと横になる 岱潤

大震災という悪夢のような現実の中で、書こうと思いついたことがあつた。それは今年に入ってから続けたお二人も師と仰いでいた人を亡くしたが、その方々の見事すぎる最後の顔のことである。

お一人は布教師会の重鎮正村瑛明師、もうお一人は地域の連合副町会長浦部武道師だ。特に正村師の御顔はすこかった。笑みを浮かべ光さえ感じられた。昔どなたのお言葉だったか、「人間は何のために生きているのか」という問いに、「お念仏をするために生きているんだ」とい

う言葉があつたが、私は正直そこまで言い切ってしまうのかと疑問さえ感じていた。でもこの正村師のお顔を拝見した時、「そうなんだ」と納得してしまった。正村師の最後の言葉「いのちが助からないと覚悟を決めたとき、助かったと思つた」と「ただひたすらお念仏を」を辞世の句とされたそのお心が正にお顔に出ていた。浦部氏もそう、人間が大好きな浦部氏は最後にみんなに会い、満足しきつたお顔で亡くなつていった。お二人ともお歳は七〇になるかどうかという満足できるお歳では決してないにもかかわらず、最後のお顔は見事だった。

自分自身では決して見ることも確かめ

ることもできない最後のお顔。素晴らしいとみんなが安心できる顔で最後を終わらせること、それが人生の一番の目的だと思えるようになった。それにはやはりお念仏しかない。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十七巻六月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十三年五月二十日

発行 平成二十三年六月一日

発行人

編集人

印刷所

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七、四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三三二五七八・六九四七

FAX 〇三三二五七八・七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
拙 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

寺輪十砂高磨播

建永2年、讃岐配流の途中、法然上人はこの地に立ち寄られ、漁師の八田治部太夫老夫婦をはじめ、数多くの人々を化益されました。その後、大永7年、堺の僧十万上人が小松の生福寺より法然上人

自画賛の「宝瓶の御影」を得て帰る途中、十輪寺に立ち寄りこれを奉納。この時より山号を「宝瓶山」と改めたといわれています。



法然上人鑽仰会の

本

当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036

こうるじっぽう 響流十方

其の二

袖山榮輝・林田康順・小村正孝

法然上人鑽仰会

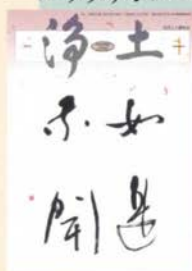
響流十方こうるじっぽう 其の二

640円(税別)

響流十方こうるじっぽう 600円(税別)



月刊『浄土』 バックナンバー



念佛讀本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円(税別)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円(税別)



浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より